

「Say no Anee」登場人物表

|        |                 |
|--------|-----------------|
| 妹尾宏太   | 悩める大学生          |
| 兄井雪菜   | 短大を卒業して就職してる    |
| 藤枝千代   | フリーター 兄井の友達     |
| 小笠原真二郎 | 妹尾の大学の同級生       |
| 長谷川みちる | 兄井や千代の友人 派手な女の子 |
| 上野弘明   | 小笠原たちの先輩 口が悪い   |

「Say no Anee」慷慨・あらすじ

妹尾宏太は、就活も恋愛もうまくいかず、やりたいことがわからない  
チャラくてデリカシーのない上野や  
無難にいろいろなことをこなせる小笠原と  
つるんでいても、いつも孤立していた。

兄井雪菜は大学には進学せず就職して日々を送っていた、  
人嫌いで自分の部屋にこもるのが好きな彼女が  
3年ぶりに高校時代の親友、みちると千代に会う。

ひよんなことからそんな人が合コンをすることになるが…

◇プロローグ

下手側 カラオケルーム 椅子3つとテーブル

上手側 駅前のベンチ

◆妹尾 下手側サス板付き

妹尾 「あの、俺気付いたんです。気づいたっていうのか思ったっていうのか、どっちかわからないんで  
すけど、トイレトペーパーを新しくセットするときにふっと。あ、俺今生きてるわ、て。」

◆兄井 上手から入り上手のサスに入る

兄井 「私、思ったんです。思ったっていうか、思ったっていうか…一人暮らしして  
三年になりますけど、どんどん自分のものが増えていくんですね。外から帰ってきて、  
自分のものに囲まれている部屋を見ると、ああ、あたし生きてるんだなって」

妹尾 「生きるっていうのは、へってゆくこと。生きるから、消費していく。」

兄井 「生きるっていうのは、ふえてゆくこと。生きるから、得てゆく。」

妹尾・兄井 「生きるっていうのは…」

M  
ゴ

照明華やかになる、兄井と妹尾は無表情。

◆千代上手から、小笠原下手から入り 向かい合って社交ダンス

◆上手から長谷川入り、千代がそれに気が付きOFFで談笑千代上手はけ 見送る長谷川

◆下手から上野入り、OFFで小笠原に声をかけて、妹尾にも声をかける

小笠原 下手奥の内線電話の受話器をもつ

上野 椅子に座り、タブレットで曲を決める

妹尾 椅子に座る

◆長谷川 スマホをいじりながら上手はけ

兄井 スマホをチラ見してから、ベンチに座り本を読みだす

◇カラオケルーム

妹尾 「こないだ、すごい久しぶりに昔の知り合いに会ったんですけど」

上野 「久しぶりってどれくらい？」

妹尾 「4、5年くらい前っすかね」

小笠原の電話は妹尾と上野の会話と同時進行

小笠原 「すみません、フライドポテトとー、コーラとジンジャエール、宏太  
なんだっけ？」

上野 「ほう、それで？」

妹尾 「すごい久しぶりじゃん！ってなって…」

小笠原 「宏太ー？飲み物ー」

妹尾 「あ、俺アイスココアで。」

小笠原 「アイスココアとー、シーザーサラダにー」

上野 「女子かよ！シーザーサラダって。で？」

妹尾 「今何してんのー？また遊ぼう見たいな話になったんですけど」

小笠原 「からあげでお願いしますー」

小笠原 電話きつて席にもどる。

◆上手から長谷川入り、兄井と合流、OFFで会話 隣にすわる

妹尾 「別れ際に、あの…」

上野 「小笠原お前これ歌えよ」

M I N ピアノの静かな曲

小笠原 「まじっすか！歌えるかなー」

上野 「宏太それで？」

妹尾 「別れ際にお前ほんとかわんねーなって言われて、なんかイラっとしちゃったんですよね」

ノリノリの小笠原と上野

ため息をついてる妹尾にダルがらみの上野

それをなだめる小笠原

◇駅前

長谷川 「てか千代遅くない？」

兄井 「もうすぐ着くみたいよ。」

長谷川 「待ち合わせ場所、ここわかるかなー？」

◇カラオケ

◆千代下手入り

千代 「お待たせしましたー、コーラとジンジャエールとアイスココアです。お料理少々お待ちください。」

上野 「いえーい！お姉さんいえーい！」

小笠原 「一緒に歌おう！お姉さんいえーい！」

千代 「すみません、仕事中なんで…」

◆千代下手はけ

◇駅前

長谷川 「そうだ、アニーに会ったら聞いて欲しいことあったの！こないだ、彼氏と別れちゃってさ」

兄井 「そうなの？」

長谷川 「しかもめちやくちや修羅場！やばかったんだから」

兄井 「どんな感じ？」

長谷川 「いや、前々から怪しい部分はあったんだけどさー、ほんとにダメ男で〜」

※千代役が上手入りするまでアドリブ

◆千代上手入り

千代 「ごめん、遅れたー。」

長谷川 「珍しいね、あんたが遅刻するなんて。」

千代 「なんか男の子たちからまれちゃってー」

兄井 「やだナンパ？大丈夫だった？」

千代 「大丈夫大丈夫、うまくまいたから。」

長谷川 「てか、この三人で集まるのって久しぶりじゃない？」

兄井 「だよね、高校卒業して以来だから、3年か…」

長谷川 「えーもうそんなになるー？」

千代 「アニー、全然かわんないね。」

長谷川 「たしかに！」

兄井 「ほんと？嬉しい…！」

上手・下手に誰も入ってないサス

上野 「なあ、宏太。なんで変わらないって言われてむかつくわけ？」

妹尾 「なんていうか、成長してない、未熟なままだと思われてるみたいで…。」

妹尾 ゆっくりとサスに入っていく

長谷川 「変わらないって言われるのって嬉しいもんなの？アニーにとって」

兄井 「うん、環境変わったり、時間がたっても、私は私なんだって思えるから。」

兄井 ゆっくりとサスに入っていく

妹尾 「変わるっていうのは、成長すること。変わるから、大きくなれる。」

兄井 「変わるっていうのは、こわいこと。変わるから、はなれてゆく」

妹尾・兄井 「変わるっていうのは…！」

照明変化 兄井と妹尾 定位置にもどる

小笠原 「あれ？っていうか、食べ物遅くないっすか？」

上野 「たしかに。」

妹尾 「ポテトとサラダとからあげだっけ？」

上野 「鶏でも捕まえにいつてんのか？ 小笠原、電話電話」

小笠原 「わかりました。」

小笠原電話をかける

千代の携帯電話が鳴る。

長谷川 「千代、電話なってるよ。」

千代 「あ、まじだ。ちよつとごめん。」

千代電話に出る。

千代 「もしもし？」

小笠原 「あの一、注文したサラダとか唐揚げとかポテトが全然こないんですけど」

千代 「あ、大変失礼いたしました。少々お待ちくださいませ。」

長谷川・千代・兄井 OFFで会話 千代がちよつと席を外す感じではけ

◆千代 上手はけ

小笠原電話切る

小笠原 「いつとききました。」

上野 「すぐくるって？」

小笠原 「混んでるからですかね、ちよつとかかるっぽいです。」

妹尾 「休日だから仕方ないよ。」

上野 「まあな、てか小笠原聞いたぞ。お前の小学校からの友達、作家デビューしたらしいじゃん。すごいよな。」

妹尾 「へえ。まじで？」

小笠原 「そうそう、俺もびっくりしたんすよ。中学卒業してから全然会ってないんすけど…」

上野 「そうなんだ？まあ、何にしても結果を残すことは大事だよな。」

妹尾 「わかります。どんなに頑張っても、苦労しても、認められなきやタダの自己満足でしかない…」

上野 苦笑い 三人変な空気になる

◆千代 下手入り

千代 「大変お待たせしました。ポテトフライとシーザーサラダとからあげです」

上野 「やっときた！」

小笠原 「すみません」

妹尾 「ありがとうございます。」

千代 「こちらお下げしちやいますね。」

飲み物をこぼす千代

それが上野にかかってしまう

上野 「ちょっと！何してくれてんだよ、これ高かったんだぞ！？」

千代 「すみません！申し訳ありませんっ…」

小笠原 「まあまあ、上野さん。宏太、悪いけど上野さんのむわ」

妹尾 「わかった、ほら上野さん洗いにいきましょ？」

◆妹尾、上野を連れて下手はけ

千代 「本当にすみません、わたし…」

小笠原 「いいからいいから、あの人もあんな感じなんだ。気にしないでいいからね」

千代 「でも…」

千代の頭をなでる小笠原

千代 「あ…」

小笠原 「君は笑ってる顔の方がかわいいんだから、いつでも笑顔でいてよ。ね？」

◆妹尾 下手入り

妹尾 「小笠原、上野さんうるさいから早くいこう」

小笠原 「わかった、すぐ行く。」

◆妹尾 下手はけ

小笠原 「じゃあね、本当に気にしなくていいから。」

上野 「(影で)おーい、小笠原く」

小笠原 「はーい、今いきます！」

小笠原を見送りながら惚けている千代

千代 「小笠原さん…」

◇駅前

長谷川 「でね、あたしもそんなんで黙ってられるわけないじゃん？」

兄井 「うん」

長谷川 「だから、お古で良かったらどうぞ！って言ってやったの！」

兄井 「へえ…かっこいいね。」

千代はけずにそのまま、駅前に舞台上からいく

千代 「何の話？」

長谷川 「千代にも前話したでしょ？元カレとの修羅場！今、アニーに教えてあげたの」

兄井 「今はじめて聞いたんだけどびっくりしちゃった。」

千代 「あれでしょ？デートのたびに、助手席から毎回違う片方のピアスが  
見つかるっていう…」

兄井 「ある意味、ホラーだよね。」

長谷川 「絶対あの女確信犯だよ、あーもう、思い出したらまた腹がたってきた！」

千代 「まあまあ、次の恋に期待すればいいじゃない。ね？」



兄井 「うーん、でもさ、今、お姉ちゃんが彼氏と同棲してるんだけど、なんかいろいろと大変そうなんだよね…。」

長谷川 「そうなの？」

兄井 「うん、大学もやめたらしいし…千代は最近恋愛してる？」

千代 「あたし？あたしは…えーと、最近ちよつと気になる人ができたかな」

◆上野、小笠原、妹尾が下手入り 動きは同時進行

OFFで会話 小笠原のスマホを覗き込みながらからかう上野

長谷川 「なにそれ！聞いてないわよ。紹介しなさいよ！てか、合コンしない？」

兄井 「話とんでる」

長谷川 「いいのよ！ね、千代合コンしょ？」

長谷川と千代 下手側のカラオケゾーンに行く

おいかける兄井

千代 「えー、じゃあ聞いて見ようかな？」

上野 小笠原 上手側で合コンの話

妹尾 上手側のベンチの真ん中に座る

兄井 「千代は、その人と付き合うとか結婚って考えてるの？」

千代 「うん。」

兄井・長谷川 「うん？」

千代 「いや、うん…どうなんだろ。結果どうなるかっていうよりも、その人とどんな風に生きていけるかのほうが重要っていうか…」

兄井 「わかる！ 結果だけじゃなく、そこまでのプロセスとか、過程を大切にしたいもんね。」

長谷川と千代が微妙な反応

妹尾、兄井 それぞれ上手と下手のサスに入る

妹尾 「生きるっていうのは、へってゆくこと。生きるから、消費していく。」

兄井 「生きるっていうのは、ふえてゆくこと。生きるから、得てゆく。」

上野・長谷川・千代・小笠原 合コンの場転

中央テーブル 周りに椅子

妹尾 「変わるっていうのは、成長すること。変わるから、大きくなれる。」

兄井 「変わるっていうのは、こわいこと。変わるから、はなれてゆく」

テーブルの上にコップや皿など

O F Fで挨拶をしたり

妹尾や兄井がこないの、上野と長谷川が電話をかける

楽しそうに談笑する千代と小笠原

妹尾 「大事なのは、結果。結果を出せないなら、自己満足にしかない」

兄井 「大事なのは、過程、どんな風に過ごしたか、それを大事にしたい。」

妹尾・兄井 「だからもう…」

着信がなる 出る 妹尾と兄井

妹尾・兄井 「はい、もしもし。」

長谷川 「ちょっと今どこ？もうみんな集まってるよ？」

兄井 「ごめん、仕事長引いちやってもうすぐつくから。」

上野 「何やってんだよ、19時集合だったろ？」

妹尾 「すみません、寝坊しました、すぐいきます。」

兄井 妹尾 席につく

席についたら明転

長谷川 「はい！それでは、全員揃ったところで自己紹介たーいむ！いえええい！」

各自 盛りあがる、自己紹介は立ち上がる

長谷川 「まずはあたしからね、長谷川みちるです。表参道で働いています！」

千代 「こう見えて、ミツチエルはすごく家庭的なんですよー」

長谷川 「もう、こう見えてって何よー」

上野 「表参道っておしゃれだねー、あ、俺上野弘明。趣味は映画鑑賞と酒！」

長谷川 「私も私もー」

兄井 「ミツチエルもお酒強いし、スキだもんね。」

千代 「私も映画好きです！えっと、藤枝千代っています。よろしくお願いします。」

上野 「いいね、気が合いそう！」

兄井 「千代は意外とホラーとかもいけちゃうんですよ。」

小笠原 「小笠原真二郎です。趣味はなんだろ、酒とカラオケと…あとゲームとか！」

上野 「出たよ、オタク趣味！ 今何ハマってるんだっけ？」

小笠原 「参天堂の新作ゲーム、NEWSーパーマリコシスターズ2！」

長谷川 「知ってる！アップル王子を助けに行くやつでしょー？」

小笠原 「そうです、シリーズ全部やってて…」

兄井 「兄井雪菜です。趣味はショッピングとか、お酒はそんなに強くありません。」

小笠原 「あれ？兄井って苗字…もしかして、兄井雪花の妹さんだったりする？」

兄井 「え、あ、はい。姉を知ってるんですか？」

小笠原 「やっぱり！いやー似てるなって思ってたんだ。俺、小学校中学校  
一緒だったんだよ？」

兄井 「…はあ。」

上野 「ほらほら、まだ挨拶してない奴いるんだから勝手に盛り上がるなって。おい」

妹尾 「あ、えっと…妹尾宏太です。」

上野 「からのー？ ノリ悪いな。なんかねーのかよ」

妹尾 「…えっと、あの、俺気付いたんです。気づいたっていうのか思ったっていうのか、どっちかわからないんですけど、トイレトペーパーを新しくセットするときふっと。あ、俺今生きてるわ、て。まあ、それだけなんですけど…よろしくお願いします。」

全員 妹尾をみる 苦笑いや失笑

妹尾の着信がなる

妹尾 「すみません…」

妹尾 上手のサスに入る

合コンのテーブル OFFで盛り上がり

長谷川が妹尾のいた上野の隣の席へ

小笠原が長谷川のいた千代の隣の席に行く

妹尾 「はい、あ、はい…わかりました。はい。いえ、はい…」

ため息をつく妹尾

合コンの方へ戻るが自分の席がなく、もたもたと小笠原のいた席につく

小笠原 「必死になって逃げまくったもん、俺！さすがに、無理だわ。あれは」

千代 「小笠原さんって結構怖いのが苦手なんですか？」

小笠原 「うん」

上野 「だめだよこいつ、かなりのビビりだから。」

以降の千代と小笠原の会話はOFFに近い二人だけの空気です

上野 「宏太、さっきの電話、面接の結果だろ？どうだった？」

妹尾 「まあ…その…」

上野 「何だよ、はっきり喋れよ。」

長谷川 「なんか妹尾さんて、他の方とくらべておとなしいですよね？」

上野 「いや、こいつの場合主体性がないだけだって」

妹尾 「前みたいな勢いがなくなってしまいましたから…」

長谷川 「勢いですか。」

妹尾 「いや勢いっていうか、熱量っていうかがむしろさ…何とかなるんじゃないかっていう自信みたいなものですかね。」

長谷川 「へえ…」

妹尾 「やりたい事とか、夢とかあったんですけどね。なんか前みたいに、一生懸命にはなれなくて。なんか生きること必死で…」

上野 「お前の場合さ、逆にいろいろわかったから、悟ったっつーか諦めたってところあるよな？」

妹尾 「そうですね、そうかもしれないですね。わかってしまったから、これ以上頑張ることができなかつたんだと思います。」

上野 「でもそれって甘えじゃん。忙しいから、お金がないから、タイミングが悪いから、いくらでもいいわけなら見つかるよ。」

妹尾 「…」

上野 「どれだけ努力しても結果出せないという意味はないだろ？言ってたじゃん、自分でただの自己満足にしかないって」

妹尾 「…」

上野 「みちるちゃんって明日仕事？」

長谷川 「お休みですよー」

上野 「まじかー、てかさ、連絡先交換しない？」

長谷川 「もちろんですー」

連絡先の交換をはじめる上野と長谷川

千代 「見栄をはるわけじゃないですけど、あたしパスタにはうるさいですよー？」

小笠原 「じゃあ、自信もっておすすめするよ！」

千代 「楽しみ！ あ、あと、藤枝さんじゃなくて千代って呼んでください。」

小笠原 「わかった、じゃあ俺のことは真二郎とか、その、しんちゃんって呼んでくれる？」

千代 「なんか照れくさいですね、…じゃあ、しんちゃん。」

小笠原 「はい。千代ちゃん！」

千代 「はい。」

小笠原 「いやあ、ほんとにこっぱずかしいですね！」

小笠原と千代 笑い合う。

上野 「なんだよお前らー、じゃあ俺もミツチエルってよぼー」

長谷川 「わーい、じゃあ私はーうえちよってよびますー」

盛り上がる 四人

千代お酒を楽しくなって飲み過ぎる

暗い表情の妹尾と兄井

上野 「アニーちゃん呑んでる？てか、最近どうよ」

兄井 「最近…今までの自分じゃダメなんだなあって思ってます。」

上野 「今までの自分？」

兄井 「そうです。若さとか、根拠のない自信？ あと、変なプライド。」

上野 「へー、なんでそう思ったの？」

兄井 「視野が広がっていくことで、いろんなことに気付いたんです。今までの自分には見えてなかったものが。」

上野 「そうなんだー、よくわかんないけど…あ、彼氏とかできたことないタイプでしょ？」

兄井 「は？」

上野 「は？何怒った？生理？」

長谷川 「なんかさ、自分が自分自身に新たな部分を見つけるっていうか、こんな部分があたしにもあったんだーみたいな発見であるよね。何だろ、その…例えていうと子供の頃、食べれなかったものが美味しく感じるみたいな。」

上野 「わかるわー。でも、俺いまだにサザエの黒いとこ食べないんだけど、そういうことっしょ？」

長谷川 「ですすす！」

上野 「なるほどねー、じゃあ、兄井ちゃんも気が付かなかった部分とか自分の知らない部分をわかったんだ？」

兄井 「そうですね、そうかもしれないですね。わかってしまったから、今以上に頑張らないといけないって思ったんです。」

上野 「へーーー」

長谷川 「アニーは努力家だからね、こだわりもあるし。結果はどうあれ頑張ったんだからいいじゃん。仕事のことで悩んでたんでしょ？今日はさ、そういうの忘れて楽しもうよ、ね？」

兄井 「…私は別に」

上野 「だから、それも全部甘えなんだって。周りのせいに結局してるじゃんねえ、コミュニケーションでわかる？ 自分の考えとか、思想とかそんなのばかりで中身べらっぺらにうすいんだよ、トイレットペーパーみたいに、だからいつまでたってもダメなんだよ。」

妹尾と兄井 勢いよく立ち上がる

照明変化&M IN

ざわつく周り

妹尾

「…もう疲れました。いろんなことが嫌になるくらいに、それでも、空気のよめない僕の胃袋は空腹を訴えるし、僕の気持なんかわからない。膀胱や大腸は何も変わらず活発に働いている。…あ、大丈夫ですか？」

兄井

「大丈夫です、なんか面白くなってきました。まだまだ私は頑張れます。それなのに、眠れないんです。ご飯も食べれないんです。前に進まないといけないのに空回りばかりで…。ついつい、買い物して気をまぎらわしたりして…。どんだん物が増えていくんです。」

兄井 カバンを持って帰ろうとする

千代

「不衛生な男はまじでくそ！清潔感のない男とかはありえない！」

酔っぱらった千代が泣き出す。

明転

小笠原

「千代ちゃんでは本当泣き虫なんだから…ちょっとお酒飲みすぎちゃったかな？」

長谷川

「兄井、あたし上野さん何とかするから千代のことよろしく！」

兄井

「え、あ、うん…」

長谷川

「うえちよー他の店で呑みなおしましよー」

上野

「ミッチェル行きつけのBARいくだろ？」

長谷川

「うん、いきたーい」

上野

「宏太、お前もがんばれよ。じゃな！」

長谷川申し訳なさそうにはけ

上野酔っぱらって、小笠原や妹尾にからみながらはけ

◆長谷川・上野 下手はけ

兄井

「千代、大丈夫？お水のむ？」

千代

「うう…きもちわるーい…」

妹尾

「小笠原、その子どうしたの？」



小笠原 「ちよつと飲み過ぎたみたいだね。家ってどこですかね。」

兄井 「千代大丈夫？この子のお兄さんにちよつと連絡してみます。」

兄井 立ち上がり 後ろをむいて電話のマイム

小笠原 「…宏太。連絡先交換した？」

妹尾 「いや。」

小笠原 「…だよな、ごめん。」

妹尾 「いや、その…」

兄井 「はい、わかりました、じゃあ、おねがいします。」

電話を終える兄井

小笠原 「大丈夫でした？」

兄井 「迎えに来てくれるみたいです。私、千代のこと駅まで送ります。」

小笠原 「よかった、あ、いえ、俺送りますよ。すぐそこだし」

兄井 「いいんですか？」

小笠原 「はい、じゃあ宏太、兄井さんのことたのむな。」

妹尾 「ああ、気をつけて。」

小笠原 「ほら、千代ちゃん行こうか？」

千代 「アニーばいばーい」

千代、小笠原を介抱しながらはけ

◆小笠原・千代 下手はけ

二人きりになる 妹尾と兄井

テーブルの上の皿やコップを片付けだす兄井

同じように片づける妹尾

兄井 「妹尾さんて、お酒強いんですね…あんまり顔にでてらっしやらない。」

妹尾 「あんまり呑んでないだけです」

無言で居酒屋のガヤガヤした音が聞こえる

妹尾 「この居酒屋すごい混んでますよね」

兄井 「そうですね」

妹尾・兄井 「人気なんですかね」

妹尾・兄井 「そんなに。」

顔を見合わせる兄井と妹尾

兄井 「そろそろ行きましょうか」

妹尾 「そうですね」

兄井 「私、駅前の薬局によって帰ります。」

妹尾 「僕もよるつもりです、トイレットペーパーが切れちゃって。」

兄井 「偶然ですね、私もトイレットペーパー買おうと思ってたんです。」

妹尾 「そうなんですか、じゃあ一緒に行きましょう」

兄井小さく頷いて帰り支度をはじめ

妹尾 「…トイレットペーパーが切れてなくなったときって、ああ生きてるなって  
思いませんか？」

兄井 「…いえ。」

妹尾 「そうですね…なんか使用して減っているのは、俺が生きているから、  
生きているからこそ使って無くなっていくんだって、俺が死んだら  
まとめ買いたしたトイレットペーパーは絶対減らないわけじゃないですか  
生きるっていうのは、減っていくことなんだって、そう思ったんです。」

兄井 「ああ、なるほど」

妹尾 「兄井さんは、ああ生きてるなって思う時ってどんな時ですか？」

兄井 「私は…自分のほしいものを買ったり、満たされてるって感じる時ですかね」

妹尾 「満たされているとき…」

兄井 「生きるって、生きてる今の自分の痕跡が残る事なんだって。なんか物だけじゃなく影響とか思い出とかもそうじゃないですか。生まれた時は何も持たずにいたのに、いろいろ知って、得ていく身に着けて買って人からもらえて…やっぱりそれが生きるってことなんだと思うんです。」

妹尾 「ああ、なるほど」

兄井 「だから、あえていうなら今生きてるって実感します。」

妹尾 「今ですか？」

兄井 「そう、この瞬間私は生きてるって…」

妹尾 「この瞬間…あの、連絡先の交換いいですか？」

兄井 「いいです。」

妹尾 「ありがとうございます。」

連絡先の交換をする兄井と妹尾

兄井 「連絡先に一人追加されました、ほら、生きるっていうのは増えていくこと。」

妹尾 「考えようによっては、登録できる枠が1つ減ったとも言えます。」

兄井 「まあ、考えようによってはそうかもしれませんが…」

妹尾 「アニーさん、登録できました。」

兄井 「…こっちも大丈夫です。」

画面を見つめる妹尾

兄井 「なんですか？」

妹尾 「アイコン、眼鏡かけてないんですね」

兄井 「コンタクトのときもありますから、たまたまです。」

妹尾 「眼鏡なしも結構好きですけどね、僕」

兄井 「!？」

妹尾近づいて兄井の眼鏡をはずす

妹尾 「ほら、こっちの方が可愛い。」

眼鏡を奪い返す兄井

兄井 「は!？ 酔ってるんですか!？」

妹尾 「あんまり飲んでないですって。兄井さんこそ、飲み過ぎました？顔赤いですよ？」

兄井 「お気になさらず！」

妹尾 「…？ わかりました、じゃ行きましょ。」

妹尾通りすがりに無意識に兄井の頭をなでる

兄井 取り乱してその反応を妹尾が見て思わず吹き出す

暗転